

編集後記

今年、大分市内でも十年ぶりに積雪があるなど、冬らしい冬となりました。会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。第一六〇号をお届けします。編集の不手際で、予定より遅れまして、申し訳ありません。

さて、本号には長野氏、鹿毛氏、佐藤氏といずれも三十代、新進気鋭の研究者の論考を掲載しました。長野氏論考は大分県とも関係のある国権主義団体紫溟会の対アジア観を一八八二年の壬午軍乱前後を中心に追及し、私たちが今なおもつアジア意識に警鐘をならす意欲作です。鹿毛氏論考は大友氏の大名領国研究の中でこれまで明らかにされてこなかった経済史にメスをいれ、戦国期の豪商と大名権力との関係を見事に描いています。佐藤氏論考は記録史料の体系的な保存と利用の必要性を訴え、昨夏の「地方史研究と歴史教育」サマーセミナーの記録と合わせ、本会とその他研究機関の今後の指針を示しています。県内地域史研究会紹介では宇佐の文化財を守る会を取り上げました。

最後に、今年の会員皆様のご活躍を祈念し、それに裏付けられた本会の活動がさらに活発となることを期待します。